

## 岩手県内の高齢者保健・福祉施設における口腔ケアの現状と課題

井上 都之, 高橋 有里, 小山奈都子

### A Study on Actual Oral Care in Seniors Special Nursing Homes and Geriatric Health Services Facilities in Iwate Prefecture

Satoshi Inoue, Yuri Takahashi, Natsuko Oyama

#### 要 旨

岩手県内の高齢者保健・福祉施設における口腔ケアの現状を把握し、課題を探索するための質問紙調査を行った。県内の全ての老人保健施設および特別養護老人ホーム計161施設に各5通質問紙を配布し、口腔ケア実施者に対して実施している口腔ケアに関する質問紙調査を行った。その結果、414の回答（有効回答数412）が得られ（回収率51.4%）、以下のことが明らかとなった。

岩手県内の老人保健施設および特別養護老人ホームで実施されている口腔ケアは1日のケア回数、一回のケアあたりのケア時間、用具、洗浄剤、終了基準等多くの点で多様である。

特別養護老人ホームのほうが老人保健施設に比べ、肺炎予防を意図したと考えられる口腔ケアの方法をとる割合が高かった。

今後、詳細な口腔ケアの方法についての実態の調査、肺炎発症との関連性の検証、施設における効率的な口腔ケアのモデル開発といった課題に取り組むことが求められる。

キーワード：口腔ケア、高齢者、肺炎予防、老人保健施設、特別養護老人ホーム

#### はじめに

高齢者における口腔ケアは、口腔内の衛生の維持により、齲蝕予防と誤嚥性肺炎予防<sup>1-3)</sup>の二つの主要な役割を持っており、近年嚥下機能や口臭、QOLなど様々な観点で着目されている<sup>4,5)</sup>。また本邦において、口腔ケアの必要な高齢者の多くが生活しているのが高齢者保健・福祉施設である。したがって、これらの施設における口腔ケアの実施は、高齢者保健にとって重要な課題である。

高齢者保健・福祉施設における口腔ケアの効果に関する検討は主として介入検討としてしばしば行われている。一方、高齢者保健・福祉施設におけるマンパワーの不足の問題、経済的な問題もあって各施設における口腔ケアの実施状況にはばらつきがあるのが現状である<sup>6)</sup>。しかし、老人保健・福祉施設における口腔ケアの現状についてはあまり大規模な報告例がなく<sup>6)</sup>、特に岩手県内の実態

は報告されていない。

本研究では、岩手県内の老人保健・福祉施設における口腔ケアの現状を調査し、高齢者保健・福祉上の課題を明らかにすることを目的とする。

#### 方法

##### 1. 調査期間

平成17年7月～9月

##### 2. 調査対象

岩手県内にある全特別養護老人ホーム93箇所および全介護老人保健施設58箇所に所属する看護職員または介護職員（各施設それぞれ5名）

##### 3. 調査方法

岩手県内の全特別養護老人ホームおよび全介護老人保健施設の施設長宛に研究の趣旨と調査用紙

を同封した文書を郵送し、調査の協力を依頼した。施設長に対する調査依頼は、口腔ケアを実施している看護職員または介護職員 5 名に対し、調査協力を依頼する内容であった。

質問項目は口腔ケアの全面的介助が必要な入居者に対して実施しているケアの内容、回答者の属性、施設の名称および入居者数、口腔ケアが全介助である入居者数と歯科医師や歯科衛生士による定期的な歯科診療の有無等についてである。

調査用紙は施設毎に同封の回収用封筒に回収してもらい、まとめて郵送してもらった。調査用紙、回収用封筒共に無記名とした。

#### 4. 分析方法

各質問項目に対し単純集計および、施設種、職種間の比較検討を行った。統計処理は SPSS® for Windows ver.14.0 によって行った。

#### 5. 倫理的配慮

調査用紙、回収用封筒ともに無記名とし、調査対象者の自由意志に基づく調査である旨依頼文書に記載し、調査を依頼することにより、調査対象者の自由意志を尊重した。また、集計過程において調査内容のコード化、匿名化を行い、統計的に処理することで、調査対象施設の固有情報が保護されるよう処理した。なお、その旨調査依頼文に

も明記した。

## 結果

### 1. 回収状況と回答者属性等

151施設に対し計755部調査用紙を配布し、回答は98施設（特別養護老人ホーム：57、介護老人保健施設：37、不明：4）から計414部得られた（回収率：51.4%）（有効回答：412）。回答者の属性は男性13.8%、女性86.2%、平均年齢37.2±10.1歳、経験年数12.3±8.6年、現在職経験年数（8.2±5.8年）、職種は看護職が25.1%、介護職が74.6%であった（表1）。

入所者の概数の平均値は介護老人福祉施設で78.7（±24.6）人、特別養護老人ホームで62.3（±19.6）人、口腔ケアが全介助である入居者数はそれぞれ、40.3±22.9人、36.2±20.0人であり、全介助者の割合はそれぞれ、53.1±26.1%、59.8±25.2%で、特別養護老人ホームの方が有意に高かった（ $p<.05$ ； $t=2.2$ ）。

### 2. 口腔ケアの内容

#### a. 一日あたり回数と一回ケアあたりの時間

口腔ケアの1日あたりの回数は全義歯、部分義歯共に3回が最多であり、それぞれ63.2%、64.4%であった。また、3回未満が、そ

表1 施設種別回答者基本属性

	性別			職種			計	平均年齢	経験年数	現施設経験年数
	男性	女性	不明	看護職	介護職	不明				
介護老人保健施設	27	128	8	51	101	11	163(41.1%)	36.9±10.1	12.1±8.9	6.8±3.9
特別養護老人ホーム	26	200	8	42	181	11	234(58.9%)	37.3±10.1	12.3±8.4	9.2±6.7
不明	0	2	0	2	0	0	2			
計	53(13.8%)	330(86.2%)	16	95(25.1%)	282(74.6%)	22	399	37.2±10.1	12.3±8.6	8.2±5.8

注：百分率は不明分除いて算出

表2 口腔ケアの施設種別職種別平均回数と配置分散分析結果

		平均値		職種	分散分析	
		看護	介護		施設種	交互作用
全義歯	老健	2.47	2.65	F=1.0, p>.05	F=0.59, p>.05	F=0.11, p>.05
	特養	2.62	2.88			
部分義歯	老健	2.69	2.68	F=0.18, p>.05	F=0.78, p>.05	F=0.25, p>.05
	特養	2.74	2.86			

表3 口腔ケアの施設種別職種別平均時間と配置分散分析結果

		平均値		職種	分散分析	
		看護	介護		施設種	交互作用
全義歯	老健	2.99	2.44	F=7.1, p<.01	F=0.19, p>.05	F=0.196, p>.05
	特養	3.20	2.45			
部分義歯	老健	2.65	2.65	F=0.174, p>.05	F=0.769, p>.05	F=0.245, p>.05
	特養	2.88	2.65			

それぞれ29.9%, 28.4%で, 3回を超えるものが6.9%, 7.2%であった。

以下回答者の属性別に検討するために平均値を用いて検討する。口腔ケアの一日あたりの回数は全義歯で平均2.70±1.04回, 部分義歯で2.75±0.99回であった。施設別, 職種別, 全義歯一部分義歯の別に平均値を表2に示した。全義歯, 部分義歯共に二元配置分析の結果, 施設別, 職種別による影響は認められなかった。

また, 一回の口腔ケアあたりの時間数は全義歯で平均2.77±1.91分, 部分義歯で平均2.75±1.77分であった。施設別, 職種別, 全義歯一部分義歯の別に平均値を表3に示した。

全義歯, 部分義歯共に二元配置分析の結果, 全義歯の入居者に対するケアについては, 職種の主効果が有意であり (F=517.4, p<.001), 看護職が介護職に比べてケア時間が長かった。有意差は認められなかったが, 介護職では特別養護老人ホームの部分義歯の対象者に対してのみ2.96±1.83と他の場合に比べて (他の場合は平均値が2.44から2.51) 高い傾向を示した。

#### b. 実施時間帯

全義歯, 部分義歯の別に時間帯別に口腔ケアの実施割合を職種毎に二つの施設種間の比較をした結果を表4および表5に示した。

表4 全義歯者に対する時間帯別職種別施設毎の口腔ケア実施者数・割合の比較

時間帯	職種	介護老人福祉施設	特別養護老人ホーム	有意検定
起床後	看護職	2(3.9%)	0(0.0%)	p=.503
	介護職	2(2.0%)	12(6.7%)	p=.094
	計	4(2.5%)	13(5.6%)	p=.140
朝食前	看護職	4(7.8%)	7(17.9%)	p=.198
	介護職	2(2.0%)	18(10.0%)	p=.014*
	計	6(3.7%)	25(10.8%)	p=.012*
朝食後	看護職	39(76.5%)	25(64.1%)	p=.244
	介護職	76(75.2%)	153(85.0%)	p=.054
	計	125(76.7%)	188(81.4%)	p=.258
昼食前	看護職	3(5.9%)	9(23.1%)	p=.027*
	介護職	4(4.0%)	18(10.0%)	p=.103
	計	7(4.3%)	27(11.7%)	p=.010*
昼食後	看護職	41(80.4%)	30(76.9%)	p=.796
	介護職	83(82.2%)	148(82.2%)	p=1.000
	計	134(82.2%)	188(81.4%)	p=.895
夕食前	看護職	2(3.9%)	4(10.3%)	p=.397
	介護職	3(3.0%)	15(8.3%)	p=.125
	計	5(3.1%)	19(8.2%)	p=.052
夕食後	看護職	46(90.2%)	25(64.1%)	p=.004**
	介護職	93(92.1%)	166(92.2%)	p=1.000
	計	150(92.0%)	203(89.7%)	p=.241
就寝前	看護職	1(2.0%)	2(5.1%)	p=.577
	介護職	5(5.0%)	12(6.7%)	p=.795
	計	6(3.7%)	14(6.1%)	p=.356
その他	看護職	4(7.8%)	2(5.1%)	p=1.000
	介護職	11(10.9%)	14(7.8%)	p=.389
	計	16(9.8%)	17(7.4%)	p=.461

注：看護職：n=90, 介護職：n=281, 全：n=394  
有意性検定はFisherの正確確率を示した。

表5 部分義歯者に対する時間帯別職種別施設毎の口腔ケア実施者数・割合の比較

時間帯	職種	介護老人福祉施設	特別養護老人ホーム	有意検定
起床後	看護職	1(2.0%)	0(0.0%)	p=1.000
	介護職	2(2.1%)	11(6.3%)	p=.148
	計	3(1.9%)	12(5.5%)	p=.109
朝食前	看護職	1(2.0%)	4(11.4%)	p=.198
	介護職	5(3.7%)	14(10.8%)	p=.464
	計	6(3.7%)	18(10.8%)	p=.132
朝食後	看護職	41(83.7%)	25(71.4%)	p=.191
	介護職	72(75.8%)	149(85.6%)	p=.054
	計	123(78.8%)	181(82.6%)	p=.354
昼食前	看護職	2(4.1%)	4(4.2%)	p=.229
	介護職	4(4.2%)	9(5.2%)	p=1.000
	計	6(3.8%)	13(5.9%)	p=.476
昼食後	看護職	43(87.8%)	27(77.1%)	p=.796
	介護職	79(83.3%)	145(83.3%)	p=1.000
	計	133(85.3%)	176(81.7%)	p=.403
夕食前	看護職	1(2.0%)	3(3.6%)	p=.303
	介護職	4(4.2%)	12(6.9%)	p=.432
	計	6(4.2%)	15(6.9%)	p=.259
夕食後	看護職	46(93.9%)	27(77.1%)	p=.045*
	介護職	88(92.6%)	163(94.2%)	p=.609
	計	145(92.9%)	198(90.8%)	p=.569
就寝前	看護職	1(2.0%)	1(2.9%)	p=1.000
	介護職	3(3.2%)	10(5.7%)	p=.553
	計	4(2.6%)	12(5.5%)	p=.202
その他	看護職	1(2.0%)	2(5.7%)	p=.568
	介護職	6(6.3%)	6(3.4%)	p=.355
	計	7(4.5%)	8(3.7%)	p=.791

注：看護職：n=84，介護職：n=269，全：n=375  
有意性検定は Fisher の正確確率を示した

全義歯者に対するケアでは、看護職、介護職の合計でみると夕食後が最も高い割合で実施しており、実施率は老人保健施設で92.0%、特別養護老人ホームで89.7%であった。その他の食後でも、8割を超えていた。食後以外の時間帯では、特別養護老人ホームの朝食前(10.8%)および昼食前(11.7%)を除いて1割に達しない実施率であった。全義歯者に対するケアでは、朝食前の介護職(p<.05)と全体(p<.05)、昼食前の看護職(p<.05)と全体(p<.05)、夕食前の看護職(p<.01)で有意な差が認められた。夕食前の看護職を除いて、特別養護老人ホームで実施割合が高かった。

部分義歯でも同様の傾向が認められ、食事前の口腔ケアの実施率は特別養護老人ホームで高い傾向であったが、有意差は認められなかった(p>.05)。夕食後の看護職では、特別養護老人ホーム(77.1%)が老人保健施設(93.9%)に比べて口腔ケアの実施率が低かった(p<.05)が、その他の時間帯については施設間の有意差が認められなかった。

#### c. 使用物品

全義歯の者に対するケアについては、大人用歯ブラシの使用割合が老人保健施設、特別養護老人ホームでそれぞれ81.7%、69.3%と最も高かったが、使用率は両施設間で有意差

が認められた ( $p < .01$ ) (図1). その他の物品では, ガーゼ, スポンジブラシで20%を超えて使用されていたが, その他の物品は20%以下であった. また, スポンジブラシ ( $p < .05$ ), くるりーなブラシ ( $p < .01$ ), 舌ブラシ ( $p < .05$ ), 綿棒 ( $p < .001$ ) で, 特別養護老人ホームの方が老人保健施設に比べて使用率が高かった ( $p < .05$ ).

部分義歯者に対する口腔ケアに使用する物品は「大人用歯ブラシ」が老人保健施設, 特別養護老人ホームでそれぞれ96.2%, 89.8%と約9割を占めたが, 老人保健施設のほうの使用率が有意に高かった ( $p < .05$ ). その他の物品では, ガーゼ, スポンジブラシで約2~3割, その他の物品は2割以下であった (図2). 施設間の比較では, 大人用歯ブラシ

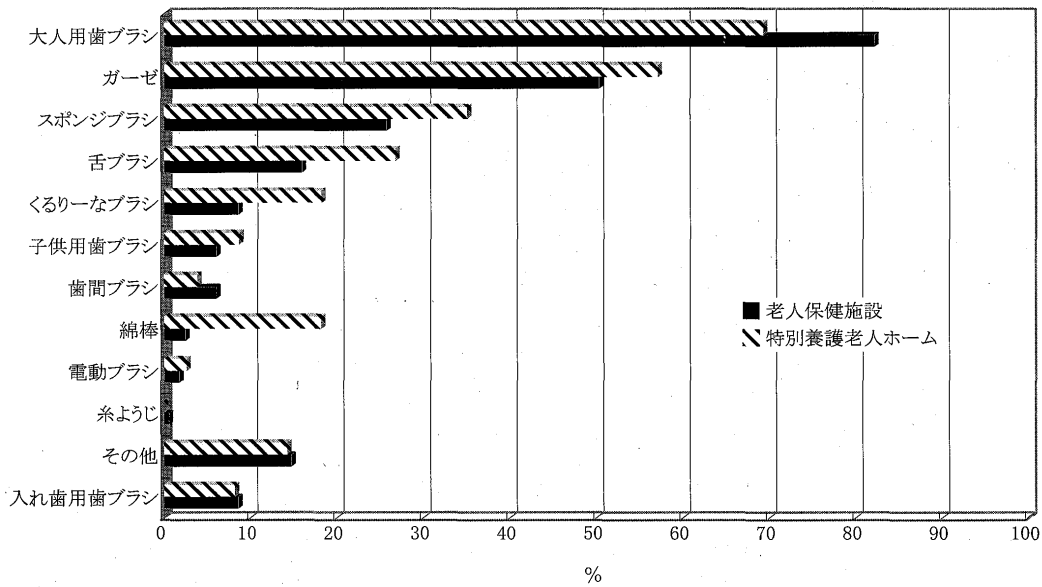


図1 全義歯の入居者の口腔ケアに使用する物品

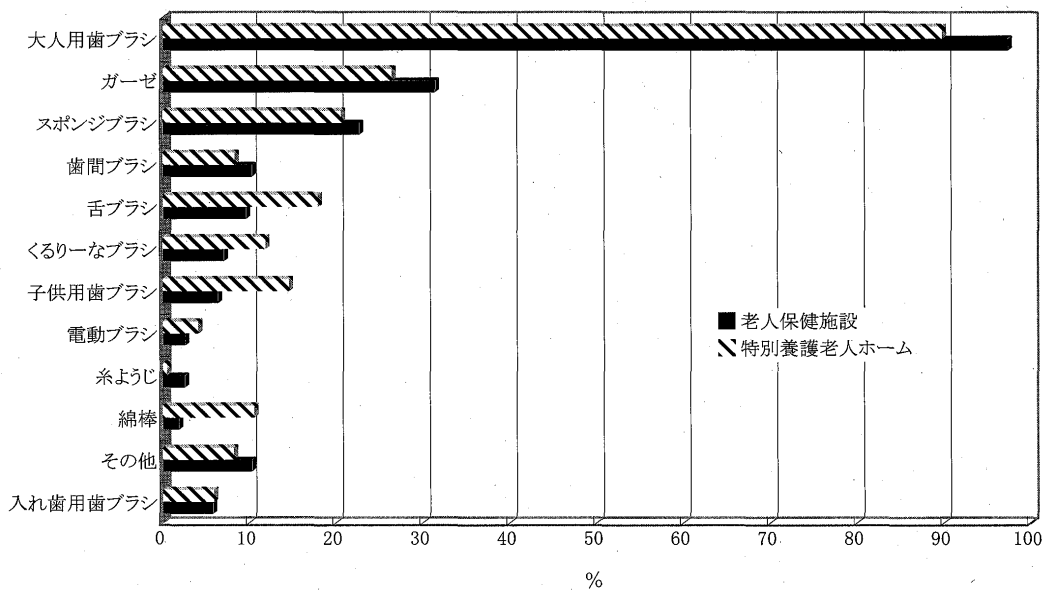


図2 部分義歯の入居者の口腔ケアに使用する物品

が有意に老健施設で使用率が高く、子供用歯ブラシ ( $p < .05$ ), 舌ブラシ ( $p < .05$ ), 綿棒 ( $p < .001$ ) で有意に特別養護老人ホームが使用率が高かった。

d. 洗浄剤使用

全義歯の対象者に対する口腔ケアで使用する洗浄剤については、老人保健施設では歯磨き粉が最多であった (69.5% : 特別養護老人ホームでは58.4%) が、特別養護老人ホーム

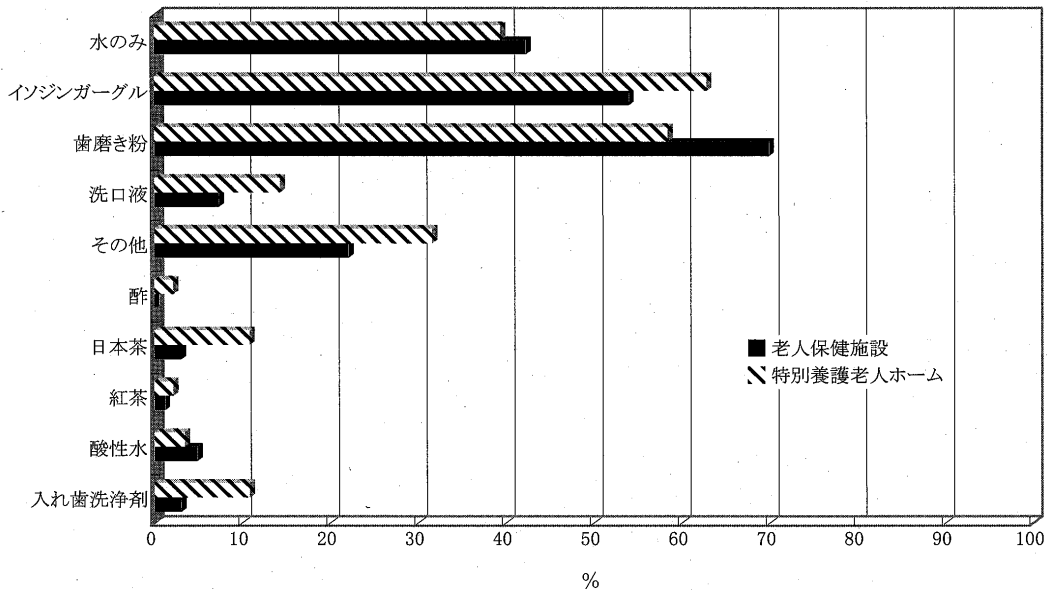


図3 全義歯の入居者の口腔ケアに使用する洗浄剤の使用割合

注：酢，日本茶，紅茶，酸性水，入れ歯用洗浄剤はその他の内容を計数したものである

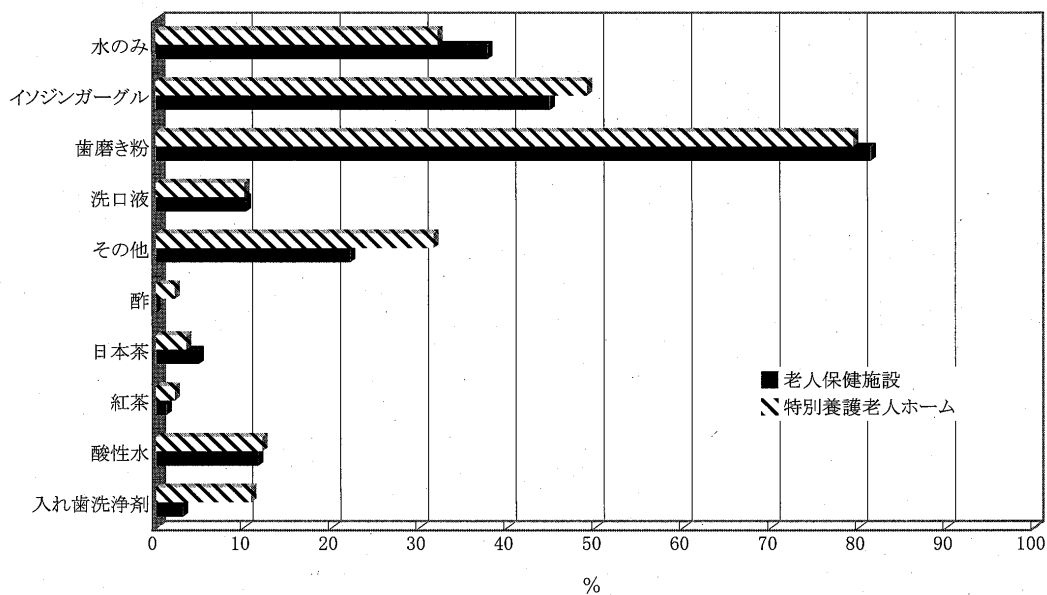


図4 部分義歯の入居者の口腔ケアに使用する洗浄剤の使用割合

注：酢，日本茶，紅茶，酸性水，入れ歯用洗浄剤はその他の内容を計数したものである

ではイソジンガーゲルが最多であった(62.8%：老人保健施設は53.7%) (図3)。水のみ使用への回答も共に約40%あった。また、イソジンガーゲル以外の洗口液は老人保健施設で7.3%、特別養護老人ホームで14.3%であった。その他として、入れ歯洗浄剤、酸性水、緑茶等の日本茶、紅茶、酢を使用するといった回答もみられた。

施設間の有意差は歯磨き粉、洗口液、その他で認められ、歯磨き粉以外については有意に特別養護老人ホームで使用率が高かった(p<.05)。

部分義歯の対象者に対する口腔ケアで使用する洗浄剤については、歯磨き粉が両施設ともに最多であり、老人保健施設では81.4%、特別養護老人ホームでは79.4%であった(図4)。また、イソジンガーゲルは特別養護老人ホームで49.1%、老人保健施設では44.9%

であった。水のみ使用への回答も共に30~40%あった。また、イソジンガーゲル以外の洗口液は共に10.1%であった。その他の回答も全義歯と同様にみられた。施設間の有意差はどの項目でも認められなかった(p>.05)。

e. 終了の判定指標

口腔ケアの終了の判定指標は、老人保健施設では、「食物残渣が無くなること」が90.9%、「ひと通り磨き終えること」が50.9%、「歯垢がとれたか」が39.4%、「舌苔が無くなること」が36.0%、「口臭が無くなること」が25.0%、「大体の感覚で」が18.8%の順であった。特別養護老人ホームでもほぼ同様の順および割合であったが、「歯垢がとれたか」と回答した者が29.2%と、老人保健施設に対して有意に少なかった(p<.05) (図5)。

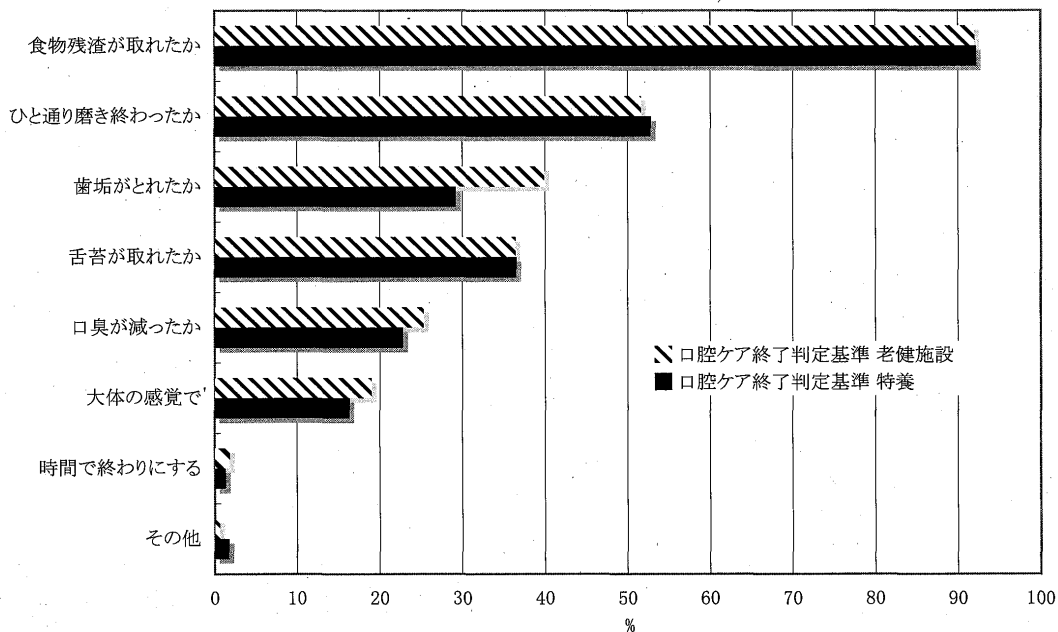


図5 口腔ケア終了判定指標とする項目の割合

表6 施設別定期的な歯科診療の有無とその対象者

		介護老人保健施設	特別養護老人ホーム	計	Fisher 正確確率検定
定期的な歯科診療	ない	69	97	166	48.70%
	不定期だがある	37	43	80	23.50%
	ある	29	66	95	27.90%
対象者	全員	4	28	32	18.80%
	口腔内に問題がある人のみ	58	80	138	81.20%

## f. 歯科診療の有無と対象者

定期的な歯科診療の有無については「ない」が48.7%、「ある」が27.9%、「不定期だがある」が23.5%であった。また、あると答えた者に対する質問における歯科診療の対象者は入所者全員が18.8%口腔内に問題のある人のみが81.2%で、施設の種別別にみると有意に特別養護老人ホームのほうが全入所者を対象とする割合が高かった ( $p < .05$ ) (表6)。

## 考察

本研究では、岩手県の高齢者介護保健施設および特別養護老人ホームの看護介護職員に対して、実施している口腔ケアについて質問紙調査を行った。その結果岩手県内の高齢者保健、福祉施設における口腔ケアの現状が明らかとなった。

まず、1日あたりの口腔ケアの回数は約2.6~2.7回で、老人保健施設、特別養護老人ホーム両施設において、全義歯、部分義歯に関わらず、大差ないことが明らかになった。しかし、全義歯の対象者に対するケアでは看護職のケアの時間が介護職よりも多かった。ほぼ3分の2が1日3回口腔ケアを実施しているが、それ以下も、約30%存在している。1日3回実施できない施設についての要因を検討する必要がある。しかし、口腔清掃が1日1回でも歯垢を除去できるのであれば、起床時の口腔内細菌数は変わらないとする報告<sup>7)</sup>、1日1回の専門的な口腔ケアの実施が、誤嚥性肺炎予防に効果があるとする報告<sup>3)</sup>もあるのでこの点については実証的な検討が必要であると考えられる。

1回の口腔ケアの所要時間数については2.7分という1回あたりの所要時間は、一般人の口腔ケア時間からすると十分であるといえるが、肺炎予防の観点からそれで十分であるかどうか検討する必要がある。全義歯の対象者に対するケアのみで介護職員よりもケア時間が多かった事実は、誤嚥性肺炎予防対策として看護師が特に何らかの意識を持った結果、所要時間が増大する可能性が考えられるが、全義歯の対象者のケアに対して、看護職と介護職の間で、作業の分担が行われているか、看護職員が回答する施設と介護職員が回答する施設での質的な差異が在る可能性も考えられる。本調査ではその細かな要因についての確認を行う

ことはできなかった。歯垢の除去に必要なブラッシング時間については12分程度とする報告<sup>7)</sup>があるが、この点は現実の口腔ケアとは適合していない。この点に関して、歯垢の有無と口腔ケアの関連性についての実態調査が必要であると考えられる。

口腔ケアの実施時間帯を詳細に見てみると、3食の後の実施率が高いのは常識的ではあるのだが、特別養護老人ホームで食事前または起床後といった食後ではない時間帯に実施率が老人保健施設に比べて高くなっているという特徴がみられた。このことは特別養護老人ホームでう触予防ではなく、別の効果すなわち誤嚥性肺炎予防を目的とした口腔ケア実施の取り組みが実現できている可能性が考えられた。誤嚥については、食事とは無関係な唾液による誤嚥、食事に関連する誤嚥と夜間の不顕性誤嚥が問題になる<sup>8)</sup>が、それぞれの場合で口腔内細菌がそれぞれどの程度関与するのは実証されていない。このことからどの時間帯に口腔ケアを実施するのが効果的であるのかについての結論は出ていない。

使用物品については全義歯部分義歯に関わらず大人用歯ブラシを使う割合が高かったが、2~3割の職員はガーゼ、スポンジブラシ、舌ブラシ、くるりーなブラシ、綿棒等を利用(併用)しており、特に特別養護老人ホームで使用率が高くなっている結果は、口腔ケアにおいて、特別養護老人ホームでより肺炎予防に重点がおかれている傾向が考えられた。肺炎でしばしば重要な起因菌となるCandidaは舌表面に存在することなど<sup>9)</sup>から、高齢者の口腔ケアに関しては肺炎予防を考える時に、歯ブラシ使用だけでは必ずしも十分な効果が期待できない可能性がある。舌ブラシの使用率が非常に低いことから考えても、口腔ケアにおけるCandida対策の実態と肺炎との関連性についての検討が必要であると考えられる。

洗浄剤の利用に関しては、歯磨き粉の利用が最多ではあったが、種々の洗口剤、酢、酸性水、緑茶などと抗菌効果のある様々な物質が利用されていることが示された。この点に関しても特別養護老人ホームで歯磨き粉以外の物質の利用率が高くなっており、誤嚥性肺炎予防への意識付けが考えられた。

一方、口腔ケアの終了の指標については食物残渣がなくなるということのが約9割を占め、この点では、口腔ケアの主目的をう触予防として設定



していることが考えられた。一方、ひと通り磨き終えることや大体の感覚でというような指標も5割あるいは2割とそれぞれ、比較的多く利用されていることを考えると形式的に行われている口腔ケアも存在することが示されたと考えられる。

本研究では高齢者保健福祉施設における口腔ケアの多様性が判明し、感染症予防の諸点から問題が散見されることが示された。口腔ケアの回数、時間、口腔ケアに使用する物品や洗浄剤、ケア終了の判定基準が多様であることについては、口腔ケアの方法と効果についての科学的検討が不十分であることを意味すると考えられる。今後、より効率的な口腔ケア実施と普及に向けて、誤嚥性肺炎予防のためのスタンダード作りに向けた研究を推進してゆくことが望まれる。

## 結論

以上から以下のことが明らかとなった。

岩手県内の老人保健施設および特別養護老人ホームで実施されている口腔ケアは1日のケア回数、1回のケアあたりのケア時間、用具、洗浄剤、終了基準等多くの点で多様である。

特別養護老人ホームのほうが老人保健施設に比べ、肺炎予防を意図したと考えられる口腔ケアの方法をとる割合が高い。

今後、詳細な口腔ケアの方法についての実態の調査、肺炎発症との関連性の検証、施設における効率的な口腔ケアのモデル開発といった、課題に取り組むことが求められる。

本研究は平成17年度岩手県立大学看護学部プロジェクト研究 A 研究補助金の助成を受けて行わ

れた。

## 文献

- 1) 新里敬, 齊藤厚: 呼吸器感染症における口腔内常在菌の意義. メディヤサークル 39: 189-195, 1994
- 2) 奥田克爾: 老人性肺炎と口腔細菌. 日本歯科医師会誌 49: 4-12, 1996
- 3) 米山武義: 誤嚥性肺炎予防における口腔ケアの効果. 日本老年医学会誌 38: 476-477, 2001
- 4) 兼平敬, 池田裕子, 他: 北海道大学医学部附属病院 ICU における気管内挿管患者に対する口腔ケアの効果判定—口臭値と嫌気性菌数からの検討—. 北海道歯誌 23: 47-53, 2002
- 5) 金久弥生: 要介護高齢者に対する口腔ケアの効果に関する実証的研究 広島大学大学院社会科学部研究科平成16年度修士論文, 2005
- 6) 石井拓男 岡田真人他 介護保険施設等における口腔ケアの実体に関する研究—第1報口腔ケアの現状と歯科医療職の関与について. 口腔衛生会誌 56: 178-186, 2006
- 7) 道重文子 表崎沙矢他: 口腔内細菌数と自覚感による口腔ケアの至適時間の検討. 徳島大医短紀要 10: 113-121, 2000
- 8) 藤島一郎: 嚥下障害の機序と治療 日本老年医学会雑誌編集委員会編 老年医学 update 2002: 103-108, メジカルレビュー社, 2002
- 9) 武藤隆嗣 譽田英喜他: 長期療養者ならびに寝たきり者の口腔常在微生物叢に関する研究. 口腔衛生会誌 50: 351-360, 2000

### Abstract

We studied on actual oral care in seniors special nursing homes and geriatric health services facilities in Iwate Prefecture via question paper investigation.

As for geriatric health services facilities in Iwate oral care carried out in seniors special nursing homes were various in many respects in tools and cleaners to use in oral care, endpoints standards of oral care, the care number of times per day, care time per one care and so on.

Oral cares of seniors special nursing homes were taken a method of the oral care that it is thought that aimed at the pneumonia prevention is higher than it with geriatric health services facilities.

It is demanded that we wrestle with investigation of the actual situation about a method of detailed oral care, inspection of relevance with the pneumonia onset, model development of effective oral care in those institutions.

**Keywords :** oral care, geriatric, pneumonia prevention, geriatric health services facilities, seniors special nursing homes